

なさけの庭

園長 児嶋 草次郎

のどかな秋を迎えています。今年は台風も来なかったので、方舟館、静養館を守る大イチョウは、枝葉もしっかりつけて、どっしりとゆったりと構えています。今年は数年ぶりに、みごとな黄葉と落葉を見せてくれることでしょう。あちこちの森で、ヒヨドリが秋を感喜するかのように高い声で歌い合いながら飛び交っています。ドングリもたくさん実をつけているようですし、園庭のキンモクセイも甘い香りを届けてくれています。畑の大根、キャベツ、白菜、人参も順調に育っており、大根はもう収穫できる太さになりました。

コロナも収束して来て、宮崎県はこの数日感染者ゼロの日が続いており、感謝です。この2年ほど色々大変だったけど、こうして落ち着いてくると、やはり、この大自然の中で生活できていることに感謝する気持ちがじんわりと胸に広がっています。

さて、今回は、現在宮崎県立美術館で開催されている「皇室と宮崎」展の児嶋虎次郎作「なさけの庭」を見た感想と、その作品を見て新たに湧きあがってきた思いを書かせていただきます。

この「なさけの庭」を虎次郎が描いてなかったら、確実に私はこの世に生まれて来てない。おそらく、倉敷の大原美術館も、今この世に存在してない。虎次郎の運命を決めた一枚の絵なのです。石井十次の岡山孤児院に泊りこんで、当時の保母と孤児たちとの触れ合いを描いているのです。

虎次郎は私の祖父ですが、明治14年、岡山県の山間地成羽町生まれ。家業は「橋本屋」と言う旅館、仕出し業。成羽町は高梁川の支流に面した1万3千石の小さな城下町でしたが、この高梁川が上流の鉾山等からの物資を輸送する舟路として整備されていたため、その中継地として発展し、文化的には豊かであったようです。虎次郎も子供の時代には、旅館に出入りする色々な旅人、町人たちから、文化的な刺激を受けたことでしょう。子供は文化によって育つのです。

小さい時から絵に対する関心は強かったようですが、高等小学校を卒業すると商売人の息子として家業を手伝うことを求められました。しかし、画家への志（こころざし）捨てがたく、20歳の時（明治34年）、家族の許しもようやく得て、友人や先輩を頼って上京します。昼間は黒田清輝の主宰する絵画団体「白馬会」で絵の基礎を学び、夜は暁星学校でフランス語を学びます。

明治35年（21歳）、東京美術学校西洋画科選科に入学。教授には黒田清輝、助教授には藤島武二等がいました。倉敷紡績の大原孫三郎との出会いは、この年です。大原家より奨学金をもうために大原家を訪れたのです。孫三郎は明治13年生まれですから、虎次郎より1歳年上。東京専門学校を放蕩で退学し、倉敷に帰って父の会社で働き始めていました。虎次郎と孫三郎との友情関係は、これから虎次郎が亡くなるまで続きます。「児嶋虎次郎」（松岡智子・時任英人）では、二人の関係を次のように記しています。

「大原の虎次郎への情愛と理解は、肉親の弟に対するよりも深かったが、同じように虎次郎の大原に対する敬慕の念も師父よりも深いため、彼の期待に応えることに全身全霊を注ぎひたすら勉学に励んだ。」

虎次郎は成績優秀で、一学年を終了すると、二学年を飛び越え三学年に進級します。クソがつくほど真面目な学生で、「児島虎次郎」ではいくつかのエピソードを紹介しています。

「美術学校へは、いつも制服を着て登校し、粗暴な学生や軟弱な学生とは付き合わなかった。」

「名誉とか利益を軽蔑して、都会の生活に冷淡であり、田園の勤労生活を評価していた。」

明治 37 年（23 歳）、東京美術学校 3 学年の成績も優秀で、なんと四学年を飛び越して、ただちに卒業となります。この時一緒に卒業した学生の中には、熊谷守一、和田三造、青木繁等がいます。それから研究科に進んで、運命の時は明治 39 年（25 歳）にやって来ます。

明治 40 年 3 月から上野公園で、日露戦争戦勝祝賀を兼ねた勸業博覧会が大々的に開催されることになったのです。その会場で美術展も開かれるということで世間も注目する中で、画学生から大家まで大いに関心を寄せます。

この美術展への出品を黒田清輝教授から強く勧められた虎次郎は、なぜか大原の紹介で知った岡山孤児院を題材に選びます。大原を介して帰省時に石井十次とも会ったりしていたようですが、岡山孤児院内の人間模様にはかなり衝撃を受けていたのでしょう。世に出るための初めての出品作ですから、自分にとって最高の題材を選ぶでしょう。当時人権思想もなく、孤児院が社会の最底辺の貧相な落伍した子供たちの群れとしてしか見られなかった時代、虎次郎は、岡山孤児院内の保母と子供たちとの生活に、小さくても人間として光輝く崇高な尊厳を見い出したに違いありません。先ほども書いたような虎次郎の性格・人格が、その真実の姿を瞬時にとらえる感性を養っていたのでしょう。

明治 39 年 11 月 18 日から岡山孤児院ベレー館の 2 階で、病気の子供を側でお世話している保母と、その回りでなぐさめている子供たち数名の情景を描き始めます。制作は、翌年（明治 40 年）の 2 月頃までかかったようです。岡山孤児院に泊りこんで、それこそ全身全霊を注ぎこんで描いたわけですが、その頃の生活について、「児島虎次郎」では次のように紹介しています。

「虎次郎は院内に寝起きし、朝の祈祷会にも出席して、ともに祈り、夜は石井十次の聖書の講義を聞き、制作中、時間があれば院内の小学校で図画を教えた。」

「このころ虎次郎の規則正しい生活や、絵に対する熱心な精進ぶりを見た石井院長が『絵描きには惜しい男だ』と感じた様子で人々に語った」

絵は 120 号（131.5×195.5）の大作として完成し、題は「なさけの庭」とつけられます。圧倒されるような大きさですが、虎次郎としては、渾身の思いで魂こめて描きあげた大作です。

結果はなんと一等賞。おまけに御覧になられた皇后陛下が感動され、宮内庁御買上げとなります。無名の画学生にとって、これ以上の榮譽はないでしょう。虎次郎にとっては出世作となりました。

一番喜んだのは大原孫三郎であり、虎次郎に対して、5 年間のヨーロッパ留学をプレゼントすることになります。また、ヨーロッパから帰ると、石井十次の長女友と結婚することにもなります（大正 2 年、32 歳）。以上のような前置きを反芻（はんすう）しながら県立美術館にむかいました。

さあ、祖父児島虎次郎の描いた「なさけの庭」との再会です。見るのは私にとっては、大原美術館と宮内庁三の丸尚蔵館と今回、3 回目になります。いや、大原美術館では 2 度見ているかもしれませんが。虎次郎没後 70 年、生誕 130 年の時に宮内庁から貸し出されたと思うのですが、もう記憶があいまいです。

私は、10 月の天気の良いある日、会いに行きました。天気の良いと書いたのには理由がありました、最初に大原美術館を見た時には、あまりに画面が暗くショックを受けており、明るい日を選んだのです。とは言っても展示室の光の量は調整されておりどうなるものでもないのですが、画面

を見る度に少々胸が痛むのです。

美術館の西口から入って室内に入り、絵の前に立ちます。東京の宮内庁三の丸尚蔵館からやって来た、畳一枚より大きな絵が私を魅了します。中央に横臥する幼児がおり、その枕元で凜（りん）とした表情の保母が正座して寝ている子供の方向を向きながら、リンゴの皮をむいています。その回りでは、5人の同じ年頃の幼児が見舞っています。窓の外にも子供が2人おり、一人は心配そうにガラス越しにのぞきこんでいます。この絵はペレー館の2階で描いたということになっていますので、ベランダから部屋の中を見ているのでしょう。ちなみにこの建物は、後にこの宮崎茶臼原に移築され、現在、この石井記念友愛社の静養館として残っています。

残念なのは、保母と手前の幼児をのぞいて、それぞれの子供の表情やしぐさが風化して判然としなくなっているということです。

虎次郎は、勸業博覧会には実はもう一点出品してしまして、故郷成羽町の水車小屋の中でくつろぐ母子と乳児を描いています（「里の水車」）。「なさけの庭」もこの絵「里の水車」の色調とほぼ同じだったと思うのですが、母親の抱く乳児が乳を飲んでやすらかに眠っていて、そのふくよかな頬の質感まで描き出されているのに比べ、「なさけの庭」の幼児たちの顔の色は落ちてしまってぼやけているのです。

ここからは想像です。カビに被われてしまったことがあるのではないかと。修復しようとしたけど、カビとともに色が落ちてしまい、全体として暗くかすんでしまったのではないかと。さらなる色落ちを予防するためか、ニスで全体にぬってあるけど、てかかってしまい、何だか異様な雰囲気となっています。

とは言っても、この絵の価値と品格は下がるものではありません。おそらく石井十次が指示したとも思われる箇所があります。保母の向こうの壁にキリストの絵が掲げられ、その下のコタツと思われる台の上に聖書が置いてあるのです。虎次郎は日蓮宗ですので、このような発想は湧かないはずですが。神が子供たちをしっかりと見守っていること、そして、この保母が聖書を心の拠り所として働いていることを、この絵を通して暗示しようとしたのだと思います。そうすると、この絵は虎次郎と石井十次の合作ということになります。それぞれを照らし出している外からの光は、いわば神からの慈光でしょう。私は西洋の宗教画以上に透明なぬくもりを感じます。キリスト教の「友愛」と日本の「なさけ」とが融合し合った世界とも言えます。

次は、おそらくもう私しか知らない証言です。保母の手前で保母を信頼した様子で身を寄せながら右手にコケシを持っている女の子はミヤモトさん（故人）です。後にこの茶臼原で自立し、彼女自身の口から、『これは私です。私の鼻はないくらい低かったけど、鼻をちゃんと描いてもらってうれしかった。』と聞いたことがあります。親子の情愛と変わらないくらい、いやそれ以上にあたかな保母と子供たちとの触れ合いを見て、虎次郎は感動したのだらうし、その情景を絵に描き出し世間にアピールすることが、ミレーを尊敬する画家としての自分の使命だと自覚したから画題に選んだに違いありません。

ここからは新たな発見です。延岡市にお住いのいつもお世話になっているある方が、この「なさけの庭」を見た感想を手紙に書いて送ってくださいました。その中に次のような記述があり、私のインスピレーションが働き始めました。

「日本の孤児を扱う様がなさけ深いことに、当時の皇后さまは感動されたのではないかとおぼれてなりませんでした。」

そうなのだ。114年前に描かれたこの絵の世界こそが、日本の福祉文化なのだ。日本にこの「な

さけ」の精神文化があり、この岡山孤児院という一つの庭の中でも、なさけ（情）を体得している一人のうら若き女性によって、子供たちが救われている。皇后さまもその日本人の精神文化を重要視されていて、その一場面をみごとに描き出されている絵を見て、心（魂）が共鳴し合ったのだろう。ここには、欧米の個人主義が入り込む隙間は全然ありません。

日本の児童養護施設は、この福祉（精神）文化を引き継いでいるのであり、もちろんキリスト教の「友愛」がバックにあったとしても、私たちの先人たちは、この「なさけ」によって、子供たちとその愛着関係、信頼関係を築いて来たのだ。この若き保母は、神に愛されるために子供の世話をしているのではなく、湧きあがるなさけ＝慈愛につき動かされて、子供に身をかかっているのだ。

平成 29 年（2017 年）8 月に厚労省よりだされた「新しい社会的養育ビジョン」は、この福祉文化（精神文化）をまっこうから否定するものです。「ビジョン」は、一言で言えば、欧米の児童施設を検証した愛着関係の理論から、施設では愛着関係ができないので人格が育たないと決めつけ、施設を否定しているのです。この「なさけの庭」の世界のような日本の児童福祉の歴史や文化を全く否定・無視しているのです。

「ビジョン」が出てももう 4 年がすぎましたが、今年 10 月に開催された全国里親大会で講演された「ビジョン」作成者の一方的な論調は全然変わっていませんでした。ある元政治家の方は、里親推進のためには施設への措置を停止すればよいとあるイギリス人から助言された旨の話を紹介されました。そんな調子で厚労省に圧力をかけて来たのだろうと、恐ろしくなりました。乳児院も児童養護施設も、憲法第 25 条の基本的な人権を守るために、児童福祉法で保障された施設です。一方で子供の人権擁護と叫びながら、一方で入所停止だの入所制限だのと言うのは矛盾しているし、子供の生存権を奪う言動だと私は思います。誤解を受けるといけないので、ここに記しておきますが、私は里親推進は大賛成です。石井十次も里親を開拓し、多くの乳児をあずけました。

「ビジョン」の中の入所停止や入所制限の文言を削除することをお願いする署名活動によって得られた署名は、11 月現在で 41452 人分集まっています。現在、12 月下旬に厚労大臣の所へ持っていく方向で関係者と協議中ですが、その表紙は、この虎次郎の「なさけの庭」にしようと考えています。「ビジョン」が施設否定のまま実践されていけば、この「なさけの庭」の中にある「なさけの文化」は確実に崩壊していくでしょう。そうなれば社会的な支援を必要とされる子供たちの居場所はなくなり、どこかの国のように社会を漂流するしかなくなります。114 年前の虎次郎・石井十次からの警告として受け止めなければなりません。皆様、御支援のほどよろしくお願い致します。